

## あとがき

子供の頃、毎年夏休みになると40日間フルに大分県にある祖父母のところに行って過ごした。

朝靄の中のにわたりの鳴き声、木々をわたる風の心地よさ、露をふくんだ草の匂い、遠く山際を走る日豊本線の列車の響き、牛馬の糞の匂い、太陽がきらきら輝き暑くなる予感、山で昆虫を探し、川で泳ぎ、寺の境内で土地の子供達と相撲をとった。夜は本当に暗かった。月明かりがこんなに明るいものだとして初めて知った。

高校生のころ、もう部活や勉強で行けなくなった頃、祖母から電話で「あの川も汚れてもう泳げなくなったんやで」と言われた。よく飛び込みに使ったあの大きい岩はどうなったのだろうと思った。50年も前の思い出だ。

その頃からずーと都会生活が続いている。人工的な構造物に囲まれて暮らしていると季節感覚が鈍くなる。気象情報とニュースで自然の変化を知る。今ネット社会の進展でバーチャルな世界が広がっている。戦争すら痛みや苦しみを感ぜずに行われる。環境破壊と言っても言葉だけで実感することは少ないのではないか。

人間は自然の一部である。自然は人間の外部ではない。自然の中に身を置いて心地よく感じられるのは、自分の中の植物性や動物性が反応しているのではなかろうか。だから自然環境は論ずるまえに感じなくてはならない。昔の人はこう歌った。

<秋きぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ お  
どろかれぬる>

今の時代、意識的に一年に数ヶ月自然に身を置いて生活し、自然の美しさや厳しさを体感することが大事ではないか。せめて月に一度でもそうできたらいいのだが。。。。。

副学長 人間環境学科教授  
木元 修一